

あ と が き

副校長 北 岡 聡

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、授業や学校行事等の教育活動が以前の形で行うことができるようになってきた1年でした。とはいえ全てを以前と同じ姿に戻すのではなく、この機会を本校の教育活動をブラッシュアップするチャンスと捉え、本当に大事な教育活動とは何なのかを改めて見つめ直してきました。続けるべきものと見直すべきものを精選する中で、本校の使命の一つである教育研究活動には、一層の工夫を重ね努力を続けてまいりました。おかげさまで今年度もたくさんの方々参加をいただくなど、教育研究協議会を充実したものととして実施することができました。

本校ではこれまで、研究主題として「主体性の高まりをめざす課題学習」を掲げ、主体的に学ぶ生徒の育成に取り組んできました。これは現学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」と重なります。中でも、今回示された「見方・考え方」というキーワードは、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、「主体的・対話的で深い学び」の実現の鍵となっています。副題を『見方・考え方』を働かせ、『深い学び』を実現する授業づくり』としての4年目は、前年度に引き続き以下の二つの重点を設け、生徒の学びを見取ることを視点にして研究を進めてきました。

- 1 「深い学び」を実現する単元構成
- 2 「見方・考え方」を働かせる「問い」

1においては、生徒はどのように「深い学び」を実現しているのか、どのくらいの生徒が「深い学び」を実現できているのか、といった到達や変容を見取ることに着目して研究を行ったことで、教師は授業実践の成果と課題を客観的に把握し、授業改善を行うことができました。2においては、生徒の自己調整力や粘り強さといった資質・能力を養う上で、自己の学びを振り返らせ、次の学びに生かすためにはどのように振り返らせるかを大切にして授業実践を重ねてきたことで、「問い」の重要性を再認識することができただけでなく、生徒にとって妥当性のある評価規準の下では、学びの自己調整を行いやすくなることが分かってきました。

研究はまだ道半ばですが、教育研究協議会では、これまでの取組の一端を発表させていただきます。皆様方には、様々な視点から忌憚のないご意見、ご助言をいただきたいと存じます。

最後になりましたが、今年度、教育研究協議会を再び開催するにあたり、日頃からご指導をいただいております文部科学省、富山県教育委員会、県内市町村教育委員会、富山大学等、関係機関の皆様からのご支援、ご協力に対し、深く感謝申し上げます。今後も変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

